

授業改善に関する実践的研究

1. 心理学一般教育におけるメディアの活用

米谷 淳 (神戸大学大学教育研究センター)

授業改善に関する実践的研究

1. 心理学一般教育におけるメディアの活用

米谷 淳（神戸大学大学教育研究センター）

序

学生に心理学に興味をもたせ、授業で話したどのテーマでもよいから、最低ひとつを他者にわかりやすく説明できるようにする。これが私の教養の心理学の目標であった。特に心理学を専攻しない受講生を相手にしたときは、彼らに単位だけが目的のやる気のない者が少なくなかったのでいろいろと工夫した。彼らが心理学関係の学科を選択しなかったことを後悔するくらいにインパクトのある講義をしようという意気込みで取り組んできた。面白くためになる授業、ハードで充実した授業を理想とし、そのような授業のあり方を模索してきた。⁽¹⁾

現在これまでの授業を基礎に神大生にフィットした新しい授業をつくりあげる作業を進めている。平成6年度はその作業の手始めとして、これまでの教養の心理学のデザインを洗い直し、新たな講義内容の精選と授業法の最適化のために、講義スタイルを対比的に設定して、学生に毎回授業評価をさせるという現場研究を試みた。本稿ではその実践を紹介し、授業改善のためのメディア活用のあり方について論じる。

この研究は授業を実際に進めながらデータを収集し、いくつかの仮説を検証しながら授業改善を進めていこうとする実践的研究の一環をなす。今回検討した主な点を以下にあげる。

- (1) 学部で心理学を専攻しない学生に適した授業形式とテーマ
- (2) 面白くためになる心理学入門講義とするために利用可能な資源と活用法
- (3) 心理学の授業に映画を利用する方法と効果性
- (4) 学生の心理学に対する関心、及び、受講動機と授業への要望
- (5) 学生の出席回数と理解力
- (6) 学生の授業評価、及び、その学部や男女による違い

なお、分析対象は平成6年度後期教養原論「心と行動」（法・経済・経営2回生担当）の授業全8回である。実践報告の前に私の授業デザインの基本コンセプトについて説明しておく。なお、心理学教育における映画の利用については、そのコンセプトとこれまでの実践を別な所（米谷 1994）に報告したのでそれを参照されたい。

授業デザインのガイドライン⁽²⁾

第一に授業設計にはリサーチが不可欠である。受講生のニーズや理解力だけでなく話題やプレゼンテーションへの反応、つまり、学生の授業感性と言えるようなものを正しく把握しないで授業をデザインすれば、授業の効果を悪くするだけでなく、学生の意欲をなくし当該科目のイメージを損なうおそれがある。

第二に受講生へのフィッティングという配慮を学生に認知させる仕掛けが必要である。自分たちへの配慮の感じられない指導者から人は身も心も離れていく。とりわけ自分の専攻科目でない科目を受講する学生は「冷やし半分」や「単位とり」が多く、彼らの学習意欲を高め、集中力を続かせるには、彼らの感性をよく理解し、彼らに対する配慮をうまく伝えていく工夫が必要である。

第三に授業には学生への配慮と同時に、彼らをひきつけ納得させるものでなければならない。すなわち、面白くためになる授業となっている必要がある。

面白くためになる授業とは学生に教師の主張を理解させ、学生にその気にさせるような授業である。⁽³⁾ 納得させずに聴衆に迎合しては楽だが飽きがすぐに来て結局は退屈な出し物となる。科目に関心のない学生に面白いと感じさせるためには彼らに教師が自ら感じているその科目(学問領域)への情熱を伝えることが一番であり、それには教師がその学問の資料や成果に対したときの驚きと喜び、その領域に接しているときのわくわくする気持ちを学生に直接表出することが大切である。

また、面白くためになる授業とは答えを教える授業ではなく、問いを気づかせ、問うことの意味や答えをみつける楽しさを期待させる授業である。限られた授業時間で教えられる事項は少なく、教室での教え込みに力を注ぐよりも学生に教室外で自ら進んでドリルや発展学習をさせるような動機づけに専心する方がよい。

第四によい授業は毎日の授業をできるだけいいものにしようとするサービス精神に支えられた日々の授業改善の努力が前提となる。現状に満足せず新しい試みに挑戦し、利用可能な資源を上手に活用して教育効果を高めていこうとする姿勢はよい授業の前提であり、たとえそれがすぐに教育効果の向上につながらなくても常に心掛けるべきである。利用できる資源には限界があり、時間や空間や規則や教師・学生の能力など多くの制約がある。その中で利用できる資源をうまく活用して最も効果があがるように最適化しながら授業改善を進めていく教師の姿勢は担当科目のよいイメージの醸成に資するに違いない。

方法

(1) 授業計画

授業計画は補遺に掲載したシラバスの通り。これを最初の講義日に実施したオリエンテーションの資料として学生に配付した。オリエンテーションでは学生に、この授業計画は当初の予定であり、ねらいや履修上の心得をよく読んでほしいこと、また授業予定には厳密に従わず、受講生のリクエストや講義の進捗などにより途中で大

表1 平成6年度後期教養原論「心と行動」(米谷担当)授業内容

回	テーマ	内容	形式
1	オリエンテーション - 顔画像処理と行動科学	スタディガイド 21世紀の美人像	AV(メディアミックス) +プリント解説
2	映画で学ぶ人間関係入門 - ノンバーバルランゲージ	対人的魅力 人間関係の諸相	AV(メディアミックス) +プリント解説
3	映画で学ぶ人間関係入門 - 人間関係の発展	映画の技法 愛についての理論	AV(メディアミックス) +プリント解説
4	心理学史 - ブスケのロゴスから ヴントまで	アナキシメネス アモールとブシケー アリストテレス 実験心理学の誕生	ディクテーション 黒板(+OHP)
5	心理学史 - 20世紀の心理学	ゲシュタルト心理学 行動主義 フロイトの精神分析学	ディクテーション 黒板(+OHP) +プリント解説
6	心理学史 - 行動科学の成立	精神分析入門 行動の科学 行動科学	ディクテーション +AV +プリント解説
7	心理学研究法	科学の4大目標 観察、実験、検査、臨床 知能と適性 いじめに関する調査	体験(アンケート) +プリント解説

幅に変更することもあることを説明した。「心と行動」の科目は半年で終了する科目であり、前・後期の2回ある。平成6年度の私の担当は前期は工学部、後期は社会系学部（法、経済、経営）の学生へ配当された講義であり、それらの内容や方法は若干異なる。すなわち、前期はエッシャーの話や錯視や聴覚や記憶に関するデモンストラーション実験をし、後期は性格検査を用いた自己分析の時間や反健康行動（喫煙、飲酒など）の講義をすることにした。実際の後期の授業の進行と内容は表1に示すようにシラバス通りではないが、授業回数が8回となったのは震災による。

（2）条件

私の講義では学史から入らず、最初の1・2回を対人魅力や恋愛などの人間関係に関する講義から入ることにしていた。特に、3年前からは映画を教材として話を進める「映画で学ぶ人間関係入門」という授業を試作、試験し、効果のあることを感じてきた。そこで、授業比較の実験的試みとして、従来のスタイルでクラシカルな心理学のテーマ（学史）を講義する授業（従来型）と、映画を見せながら現代的な心理学のテーマ（人間関係）を扱う授業（新型）の2種類の授業を、学生に評価させることにした。その際、両者を対比させるため、講義スタイルも前者は教師がノートを読み上げて学生に書き取らせ、ときおり板書して解説するというディクテーション・スタイル、後者は口語体でスピーディーに教材を解説していくナレーション・スタイルとした。表1に示したように、実際には新型は第1回から第3回、従来型は第4回から第6回までとなった。体験型の授業も予定していたができなかった。しかし、某アンケート調査への協力を依頼され、7回目の授業中にこれを行ったので、7回目を体験授業として扱うことにした。

（3）手続き

毎回、授業評価を学生に記名で提出させた。質問紙様式は補遺の通り。それを第2回から第7回までの6回実施した。学生は授業開始時に質問紙をとり、授業中に記入し、授業終了時に教卓の上に置いて教室を出た。第1回では、学生は私の求めにより5項目の評定と受講動機と授業への要望を紙に書いて出した。

結果・考察

（1）受講者

1回以上アンケートを出した受講者は全部で334名であった。受講者は履修登録者と同じでないので登録者名簿は参考にならない。7回目までの授業で最低1回アンケートを出した者、または、小テストをした者を受講者とみなした。受講生の各学部別の男女構成は表2の通り。

（2）受講動機と授業への要望

第1回のアンケートをもとに学生の受講動機と授業に対する要望を集計した結果を表3に示す。受講動機は多重回答の結果であるので頻度をもとにみていくと、「心理学（心と行動）に興味があるから」とした者が他と比べて顕著に多く、次から順に、「講義要項をみて」「1年（前期）に心理学をとった」「他の授業と比べてみて」となっている。また、「友人にすすめられて」と「まわりの者がとるから」といった動機も合わせると20名近くいる。これは友人や周囲の情報や行動が学生の科目選択に及ぼす影響が小さくないことを示しており、同時間帯に聴講可能な科目の受講生数に大きな格差を生じさせる「な

表2 受講生の構成

学部	男子	女子	計
法	89	29	118
経済	98	23	121
経営	68	21	89
工	6	0	6
計	261	73	334

だれ現象」の要因となっていることが推測される。なお、「友人にすすめられて」というカテゴリーに含めたものの中に「単位がとりやすいときいた」と書いた者が3名いた。

さらに、少数ではあるが「AVを使うから」と答えた学生が全体で6名いたことは特記すべきであろう。授業要項にメディアミックス形式をとることが書かれてあったので、「講義要項をみて」と答えた学生の中にもAV使用に興味をもって選択した者がかなりいることが推測される。

なお、講義要項にはこの講義が行動科学的アプローチを取り扱うことがうたっていたが、2名の経営学部生が「自分の専門と関係ありそうなので」と答えていたことはこのことと関係があるだろう。

次に、授業への要望についてみてみよう。一番多かったのは「AVの使用」であり、次に「身近な、具体的な例を」「わかりやすく」がきており、その他、少数であるが、「実験や体験できるものを」という要望があった。第1回は、イントロダクションとしてテレビ番組の録画を見せながら私が研究している顔画像のコンピュータ分析・合成について話したが、この授業の形式やテーマに学生の要望が影響を受けたことは十分推察される。しか

表3 受講動機と授業への要望（多重回答）

a. 受講動機

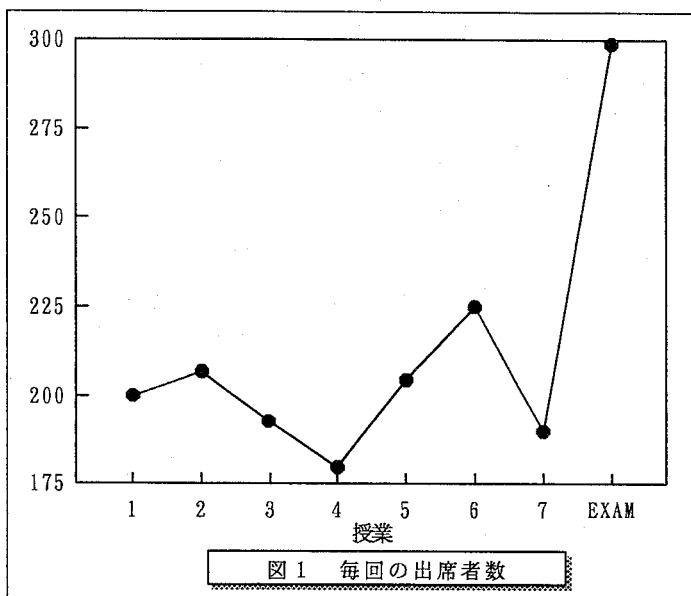
順位	項目	法	経済	経営	計
1	心理学（心と行動）への興味	46	30	18	94
2	講義要項をみて	18	13	8	39
3	1年（前期）に心理学をとった	1	17	6	24
4	他の授業と比べてみて	6	10	5	21
5	友人にすすめられて	3	4	2	9
5	まわりの者がとるから	1	6	2	9
7	AVを使うから	2	0	4	6
8	らくそう、単位とれそう	2	0	2	4
8	なんとなく	0	2	2	4
8	授業に出てみて決めた	1	1	2	4
11	自分の専門との関係	0	0	2	2
11	心理学を落とした、とれなかった	0	1	1	2
13	仕方なく	0	0	1	1
	その他	0	0	0	0

（なお、工学部生の回答は「友人が教科書を持っていたから」「教室が狭いので聞き易いと思った」の2件だけであった。）

b. 授業への要望

順位	項目	法	経済	経営	工	計
1	AV（映画、VTR）の使用	8	2	8	0	18
2	身近な、具体的な例を	2	8	0	1	11
3	わかりやすく	4	0	3	1	8
4	実験や体験できるものを	0	1	3	0	4
4	深層心理、夢のテーマを	1	0	3	0	4
6	対人関係、社会心理のテーマを	2	0	0	0	2

（「マイクの使用」「教室を広いものにして」という要望が複数あった。また、1名のみテーマ・リクエストには「イメージトレーニング」「芸術に関するもの」「経営学部に関係のあるもの」「日本人特有の行動について」があった。）



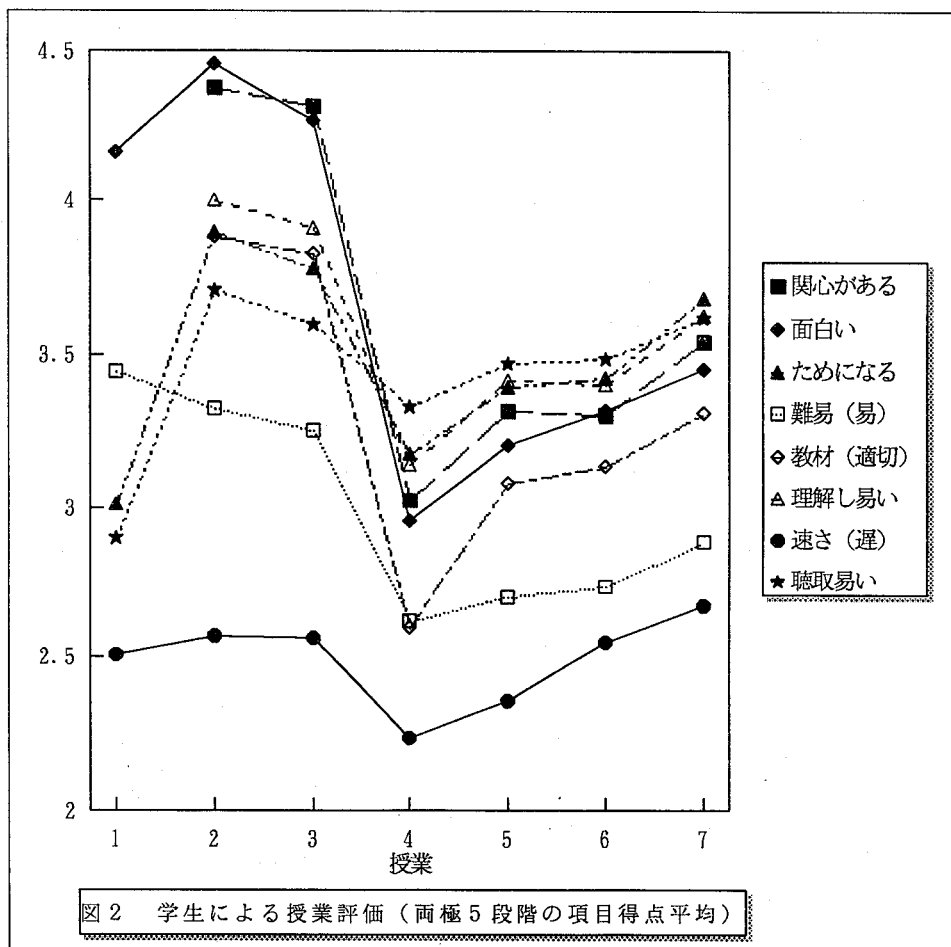
しながら、学生の期待する授業がどのようなものかはここからかなり伺い知ることができるのではなかろうか。

(3) 出席者数と学生による授業評価

図1は出席者数を、図2は授業評価の7つの項目の項目得点の平均値を、それぞれ授業日を横軸にとってプロットしたものである。図2は、「話し方の速さ」の項目を除き、すべて上がポジティブな反応、下がネガティブな反応となるようにして表示した。

出席者が最も多い(N=299)のは小テストがあった8回目である。前もって学生に小テストの実施を知らせ、小テストを単位認定の重要な参考資料

とすると宣言していたので単位がほしい履修登録者は全て出席したはずである。次に出席者数の多いのは6回目である(N=225)。当初は6回目あたりで小テストをすると言っており、このことが関係しているかもしれない。6回目に小テストの実施日を8回目にする传达了が、7回目に出席者が落ちたのはそのためかもしれない。6回目以外の出席者数は小テスト受験者の7割にも達せず、最低は4回目の6割であった。



次に、授業評価の継時的変化について考察してみよう。図2には条件差がきわめて明瞭に表されている。AV教材による対人行動を扱ったナレーション・スタイルの新型授業は心理学史についての伝統的なディクテーション・スタイルの従来型の黒板授業よりも学生にすべての項目についてポジティブに評価されている。無論、この結果からAV授業が黒板授業に優るなどということは言うつもりはない。条件統制が不備であり、独立変数も曖昧で、フェアな比較ではない。

学史の講義についてもギリシャ神話などを挿み、OHPで古典的な心理学者の写真や原著を提示するなど

してできるだけわかりやすく面白い授業となるように心掛けた。しかしながら、やはり、受講生は全体的に、対人魅力や恋愛などの人間関係に関するテーマの方により関心が高く、映画を使ったAV授業の方が面白くためになると感じたようである。これらの結果と感想（補遺参照）から、彼らは概して映画へのリテラシーがあり、映画を授業に用いてナレーティブに講義しても、映画のシーンを楽しみながらもストーリーや映像に没入してしまわず、授業のテーマを十分理解して人間関係についての学びを得ていることが示唆される。

また、7回目の授業が5・6回目よりややポジティブに評価されているが、体験授業が評価されたのか、それまでのディクテーション・スタイルをやめて、プリントを配って概要を黒板を使って説明する形式に変えたのが評価されたのかはわからない。が、心理学の調査や実験に参加することで心理学に興味をもつようになる学生がいることは補遺に載せた学生のコメントからも推測できる。

(4) 小テストの成績と出席回数

出席回数と8回目の授業で実施した小テスト（持ち込み可、試験時間60分）の得点（満点100）を学部ごとに男女別集計をした結果を表4、表5に示す。分散分析の結果、小テストの得点も出席回数もすべて女子が男子を有意に上回っていることが確かめられた（下位検定でそれぞれ $df=1, 1; F=7.176, 8.031; p=0.0078, 0.0049$ ）。また、学部の効果を分散分析してみたところ出席回数の変動が有意であり（ $df=3; F=3.055; p=0.0286$ ）、下位検定の結果、経済学部の出席回数が法学部と経営学部より有意に高いこと（ともに $p<0.05$ ）、また、経済学部の小テストの得点が経営学部より有意に高いことがわかった（ $p<0.05$ ）。さらに、出席回数と小テストの得点に関して散布図を描いてみたところ出席回数と小テストに弱い正の相関が予想された。そこで、分散分析したところ出席回数による得点の変動が有意であった（ $df:(7, 291); F=5.21; p=0.00001$ ）。それらの間の相関係数は $r=0.283$ である。

(5) 全出席者のデータによる多変量解析

学部や性別により授業評価やテストの成績がどのように違うかを調べるために、第1回から第7回までの授業にすべて出席してアンケートに回答し、第8回の授業で実施した小テストを受けた学生（ $N=74$ ）だけを選び出して、彼らのデータを用いて次の要領で多変量解析してみた。まず、彼らの第1回から第7回までの7回分の授業評価の平均値を項目別に求め、それらと小テストの得点を学部別・男女別の6つのグループごとに平均した。なお、工学部のデータは1名のみであったので除外した。次に、それら6グループのデータを主成分分析し、第1主成分（因子1）をX軸、第2主成分（因子2）をY軸とした2次元平面上にプロットし（図3）、その図における各グループの相対的な位置関係をもとにそれぞれの授業感性を考察することにした。

図3から法学部、経済学部、経営学部の男女学生、計6グループの授業感性を推測してみることにする。図3には参考に各変数の重心も示している。それらを手掛かりに2軸（因子）を解釈する。X軸は授業内容の理解しやすさが左端、説明の難しさが右端にきており、理解についての軸とみなせる。Y軸は上方の軸付近に小テスト

表4 出席数の学部男女別平均

学部	男子	女子	計
法	4.39	4.62	4.44
経済	4.14	5.52	4.40
経営	3.31	4.43	3.57
工	5.00		5.00
計	4.03	4.85	4.21

表5 小テストの成績の平均

学部	男子	女子	計
法	87.1	91.0	88.0
経済	90.1	92.3	90.6
経営	87.8	90.8	88.6
工	87.6		87.6
計	88.4	91.4	89.1

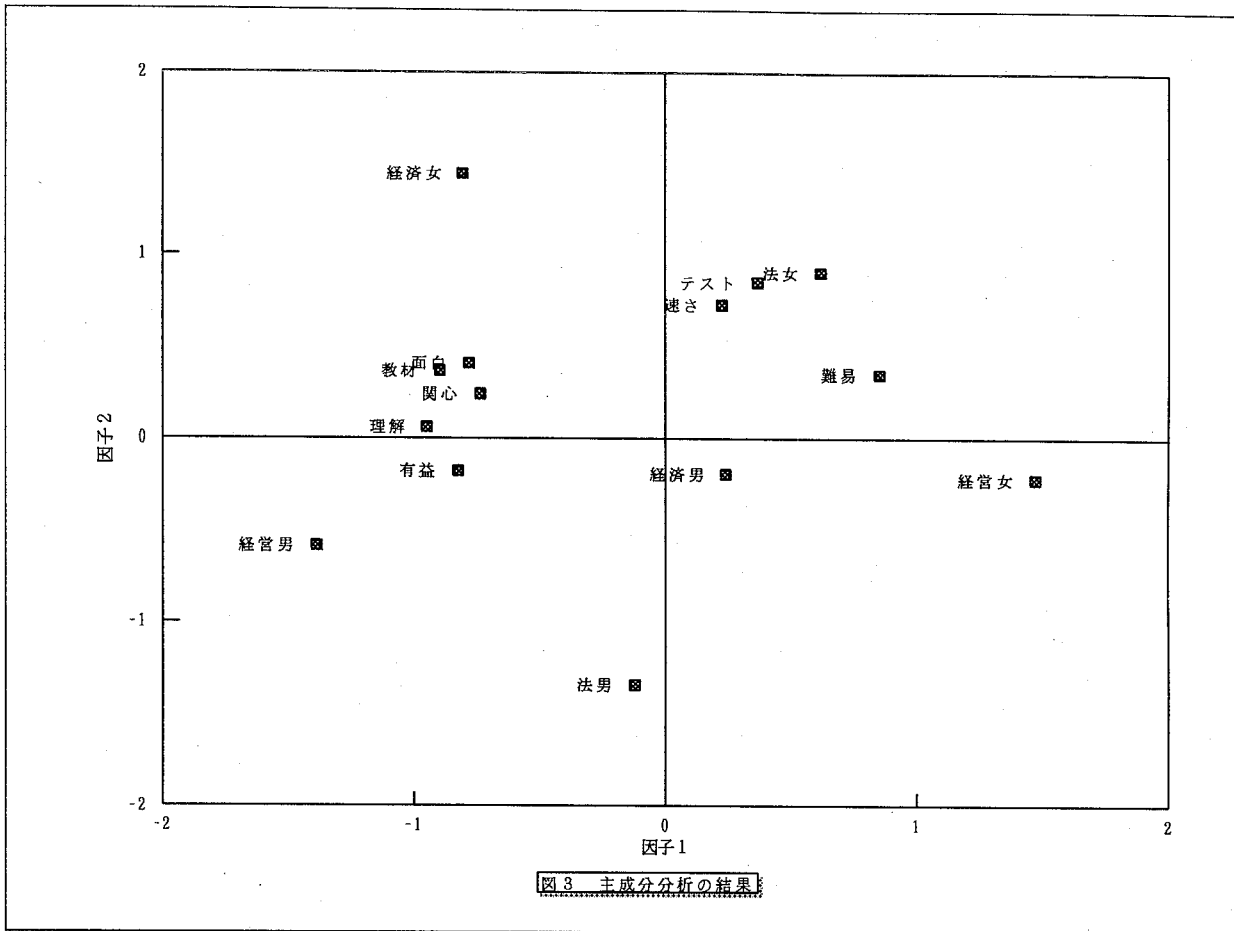


図3 主成分分析の結果

の得点があるので、学習についての軸とみなせる。また、他の変数と比較して下の方に授業内容の理解しやすさや有益度がきており、Y軸が成績や単位と授業から得られる実質的な学びのどちらを重視するかといった受講者の意向の違いを反映したものとも考えられる。

ここで、この2軸によって分けられた4つの象限を図4のようにシマティックに解釈してみることにしよう。2軸がともに正である第1象限には授業内容が高度で難度の高いものでも挑戦し、よい成績をあげようとするアチーブメント志向のタイプが対応する。このタイプは授業のテーマや方法の変化にあまり反応せず、試験の点数に関心があるタイプとも言える。ここには法学部女子グループが位置している。2軸がともに負である第3象限には授業の面白さと内容を積極的に評価するタイプであり、点とりにはそれ程関心がなく、むしろ授業の実質的な効果を大事にするプラグマティックなタイプと言えよう。これには経営学部男子グループが属する。法学部男子も第3象限だがY軸付近である。彼らのテスト成績が他のグループより悪いが授業評価について平均的である。経済学部女子が位置する第4象限は授業の内容や方法への反応がよく、小テストの得点も高いグループである。これは授業感性が高く、学習もよくするタイプと言えよう。経営学部女子はX軸右端に位置しており、テストの成績については特徴がなく、授業評価が最も辛いグループである。経済学部男子は原点付近にあり、他と比べて目立った特徴がない平均的なグループである。

以上の解釈は8回すべてに出席した学生のデータにしか基づいていないテンタティブなもので、学部間比較や性差の検討にじかに役立つこと

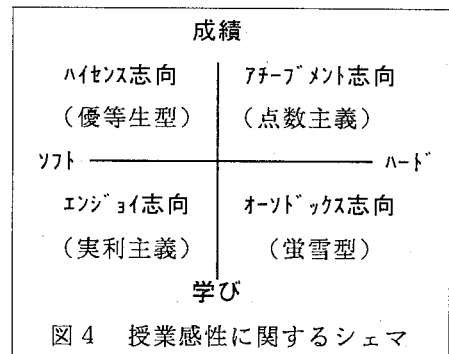


図4 授業感性に関するシマ

はないだろうが、各学部や男女による評価に違いのあることを示しており、それぞれの評価値の解釈や比較の際に補正が必要なことが示唆される。

討議

以上のように、心理学を学部で専攻しない社会系学部2回生を対象とした一般教育の心理学の私の講義を選択した学生は人間の心理や行動への興味を抱き、講義要項を参考にしながら、友人や周囲の影響も受けつつ選択を決定していた。そして、授業はAVを使用し、具体例をあげ、わかりやすいものにしてほしいという要望もっていた。また、受講生たちは、総じて、学史を読み上げ、専ら黒板しか使わない授業よりも、人間関係についての身近なテーマを、映画等で視覚化しながら語りかけていく授業の方が面白くためになると評価した。また、出席率、学習度、授業評価には、男女差や学部間の差異がみられることがわかった。すなわち、女子の方が男子より出席率、小テストの得点とも高いことが確かめられ、経済学部、経営学部、法学部それぞれの男女のグループ間でも、テストの点数を重視し、授業のテーマや内容にそれほど関心を示さないグループがある一方、テストの点数にこだわらずに授業の面白さや実質的な内容に反応をよく示すグループがあるなど、授業感性に差があることが示唆された。

もっとも、この結果は厳密にある特定の要因のみをコントロールし、ランダムサンプリングされ、マッチングされた被験者群で行った実験の結果ではなく、どのテーマも、また、それに対応した授業法も恣意的なものではなく、それなりの必然性があり、できるだけ成果をあげるべく努めた授業の中で得られたデータに基づくものであり、一般化することは危険であろう。しかし、少なくとも学生のニーズや映像リテラシーやAV授業の効果性や授業工夫への反応を確かめることができたのではなかろうか。

メディアの効果

メディアを授業に用いる上での第一の問題は授業が授業でなくなることへの危惧であろう。それは、映画やコンピュータなどをとりいれた授業をしたときに、学生が授業そっちのけでストーリーやパソコンに没頭してしまい、授業が「楽しかったが、何をやったのかわからない」ものになってしまうことである。私もある短大で映画を見せながら人間関係を説明する授業でその種の失敗をした経験がある。学生に授業の感想を書かせたところ、「映画鑑賞に邪魔だから、途中で先生が話さないでほしい」「見せるのなら全部見せてほしい」「ストーリーがわからなくなるし、作品に感情移入できないのでコマギレ、トバシ、早送りはやめて」といった意見が続出し、「映画をみせて講義を手抜きするのはやめてほしい」といった批判まで頂戴したことがある。私の場合は映画を教材として使用するときの準備の方が大変であり、VTRを見せている方が黒板授業より饒舌となる。それにもかかわらず、苦勞が全く報われず、映像教材の活用にも否定的な考えをもったこともある。しかし、その後も映画授業を工夫を重ねながら繰り返した。その結果、今では講義へのAV教材の活用にもポジティブな考えを持つようになってきている。授業への真摯な心構えと映像リテラシーのある学生を対象に、モンタージュ技法やカメラアイや映像とコトバの違い等(杉山 1975)を説明してから映画教材を活用すると、今回のように多くの学生に正しく評価され、教育効果も高い授業となる。メディア使用は受講者の構えや感性の正しい把握と、それに基づく適切な導入が前提となる。リサーチと工夫がメディア使用の成否を決めると言っても過言ではない。

ファカルティ・ディベロップメント⁽⁴⁾におけるメディアの活用

ところで、毎回の授業に対する学生評価であるが、これは、7年前、私が初めて教養の心理学を講義したときからの習慣であり、たいいてい学生にノートの切れ端に書かせて提出させるようにしているものであり、決して今

回の授業分析のために特別にさせたものではない。もっとも、統計的検定や多変量解析を含めた統計解析をしたのは今回が初めてである。学生のアンケートを授業直後に読むことは私の楽しみのひとつである。

授業に対する学生アンケートは学生と教師の間のコミュニケーション・メディアの一つである。授業がどの程度うまくいっているかは学生の表情やしぐさをよくみていればわかる。たとえ学生の顔が見えなくても、民主的な雰囲気では授業をしておれば授業中の学生の発言や質問から、学生のわからないところ、誤解しているところへの気づきが得られる。授業中に時々小テストをしてチェックすることが有効な場合もあるが、テストの濫用は学生の反発を買う。テストによるチェックより、気軽に学生が教師と接することができる環境整備の方が大切である。ゼミでは研究室のコーヒータイトムや学外のコンパなどで学生とのコミュニケーションをとるように日頃心がけておけばよい。私はそのような機会に授業中おとなしなかった学生から直接に授業の進め方やテーマについての強い要望や激しい抗議を受けて驚いたことがある。

今回の講義のように 300名をこす「一期一会」の他学部の学生にする一般教育の授業では、私が使っているようなショートアンケートが「無二」のコミュニケーション・チャンネルとなることもあろう。それも、アンケートを読んでうまくいかなかったことを反省するより、学生からポジティブに評価されたことを喜び、それで自己強化していくことが授業をよりうまくできるようになるコツではないかと考える。授業についての学生アンケートはあくまで担当者が自分の授業改善のために使用してこそ意味がある。第三者がそれを実施し、担当者どうしを比較したり、比較の結果を第三者が担当者につきつけても、授業改善はあまり進まないだろう。なぜなら、授業改善は教師が対人関係技能や幅広い教養や学問研究などについての自己の資質を自ら改善することから始まるのであり、授業改善は各自が創意工夫しながら自分でなければできない授業を自発的につくりあげていく営みに他ならないからである。ファカルティ・ディベロップメントの精神はまさにそこにあると考える。

TVやLANなどを含んだマルチ・メディアもの活用もあくまで教師と学生との間のコミュニケーション・メディアの一つにすぎない。映像や音声やコンピュータシミュレーションなどを授業にふんだんに盛り込んだとしても、教える側の意図や情緒的なメッセージが伝わらなければ、クールな授業になる。まして、そうしたメディアを仲介させることで学生がモニター画面ばかり見て教師の方を向かなくなり、教師も学生の顔を今まで以上に見なくなるならかえってよくない。授業とは教える者と教わる者との間で営まれる教室でのコミュニケーションである。そこではコトバや文字などにより認知的メッセージがやりとりされるだけでなく、喜怒哀楽や雰囲気などの情緒的メッセージが主として非言語チャンネルを介してやりとりされる。それ故、学生の教師理解に優るとも劣らず教師の学生理解が授業成功の秘訣となるのである。コミュニケーションのための表現力と対人感受性は個性と同様、それぞれの工夫と努力で磨くしかない。ファカルティ・ディベロップメントにおけるメディア活用は、教育がそうであるように、教師のアートに属するものである。⁽⁵⁾

注

- (1) 私が行った心理学の専門基礎教育の実践には、奈良大学社会学部におけるSAS教育（米谷・碓井・長谷川 1989；米谷 1991）や心理学のための情報教育（米谷 1993a）や、大阪大学情報処理教育センターでのNeXTによる心理学実験実習へのCSCW導入の試み（米谷 1993b）などがあるが、基本的なアプローチは教養の場合と異なるものではない。
- (2) このガイドラインの基礎には、以前行ったヒューマン・インタフェースについての実践的研究（米谷 1988, 1989a, 1989b）がある。そこでは、コンピュータに対するネガティブなイメージがコンピュータ学習を妨げること、また、イメージ形成にインストラクターのリーダーシップ行動が大きな影響を与えることが大学生を対象とした実験とアンケート調査により調べられた。

- (3) このコンセプトは若者を「その気にさせる」仕事デザインの重要性を力説したリクルートワークデザイン調査室の講演資料やマコビー(1989)の「新世代人」の動機づけの多様性を説いた本などをもとにしている。
- (4) ファカルティ・ディベロップメントを、ここでは、大学における授業担当者の教授技能、及び、その基盤である指導者としての幅広く高適な教養や人間性といったような資質の向上という意味で用いている。これは、岡田(1994)が力説するように大学における一般教育を「“liberal arts”の研鑽を通じて獲得されたる」「人間固有の精神的価値や尊厳性へと自己を磨き高めた結果たる」フマニタースの教育とする上で、当然不可欠の要素である。
- (5) 授業改善についての豊富な実践をふまえて書かれた参考書は、残念ながら大学教師の手になるものにあまりよいものがないように思われる。教育と研究のジレンマは江原(1994)が述べているように、大学の高等教育における根元的難問であろう。授業は実技・実践であり、教師の教育哲学の深化や自らの学問研究への専心だけでは専攻以外の学生がついてこないことは教養の授業担当者が日々実感している。また、授業への活かし方を書かずに教育機器のシステム構成や操作法だけを説明したのも、コンピュータやAV機器が次々と更新されていく状況ではすぐに使いものにならなくなる。私の手元に大村はま氏の「教室をいきいきと」(例えば、大村 1986)のシリーズがあるが、これなどはそういった意味で授業改善の工夫をする上での絶好の手引きであり、よき指針書である。

文献

- 江原武一 1994 教育と研究の関連について -アメリカの高等教育を事例に- 京都大学高等教育教授システム開発センター編 大学教授法の研究開発のために 7-17.
- 大村はま 1986 教室をいきいきと 2 筑摩書房
- 岡田渥美 1994 大学における「教養教育(高度一般教育)」の理念 京都大学高等教育教授システム開発センター編 大学教授法の研究開発のために 18-39.
- 米谷 淳 1988 コンピュータ・リテラシーとコンピュータ・イメージに関する心理学的研究 1. 序 第4回ヒューマン・インタフェースシンポジウム発表論文集 95-97.
- 米谷 淳 1989a コンピュータ・イメージとコンピュータ・リテラシーに関する心理学的研究 その2. コンピュータ・イメージの予備調査 日本心理学会第53回大会発表論文集 424.
- 米谷 淳 1989b コンピュータ・イメージとコンピュータ・リテラシーに関する心理学的研究 その3. 長期キーボード練習によるイメージの変化 第5回ヒューマン・インタフェースシンポジウム発表論文集 319-324.
- 米谷 淳・碓井照子・長谷川計二 1989 PC版SASの一年間 SUJI-J'89論文集 255-262.
- 米谷 淳 1991 統計パッケージのヒューマン・インタフェース-PC版SASを例に SUJI-J'91論文集 221-228.
- 米谷 淳 1993a 心理学の情報教育 私情教ジャーナル 1, 4, 20-21.
- 米谷 淳 1993b NeXT(sweats&tears*teamwork)=reports 大阪大学情報処理教育センター広報 10, 27-37.
- 米谷 淳 1994 心理学教育への映画教材の利用 日本映像学会第20回大会発表概要集 20-23.
- マコビー, M. (川勝 久 訳) 1989 新世代人のモチベーションとリーダーシップ ダイヤモンド社
- 杉山平一 1975 映画芸術への招待 講談社(講談社現代新書)

補遺

1. シラバス

種類・科目名・単位：教養原論（人文） 心と行動 2単位

期間・日時：1994年後期 金・2限（10:50～12:20）

教室：F301

教官：米谷 淳（まいや きよし）

講義のねらい

現代人の認識と個人や集団の行動を取り扱う行動科学（Behavioral Sciences）の中心領域のひとつである現代心理学のあり方を提示したい。心理学は、これまでは臨床心理学を除けば理論や方法の探究に専心する基礎心理学が主流であったが、最近では問題解決や実践に力を注ぐ応用心理学の分野の発展がめざましい。行動科学は学際的・問題解決的アプローチをとるところに特徴があるが、現代の心理学もまさに行動科学的アプローチをとるところに特徴があるといえよう。本年度は、行動科学としての心理学について、さまざまな分野の成果を紹介しながら、学生諸君に理解してもらいたい。

講義内容：テーマ（教科書該当頁）〔配布資料〕・キーワード・参考文献・課題

以下のプログラムは1回1節の予定であるが、場合によっては1節に2～3回をかけることもあり、進度や学生の理解度や要望により適宜変更するのであくまで目安と考えてほしい。

第1節 オリエンテーション〔VTR教材 21世紀の美人をさぐる〕

行動科学的アプローチ、学際的、問題解決的

課題1 「行動科学ハンドブック」を最初から最後まで読み通して書評を書け。

課題2 行動科学的アプローチとは何か。具体的な例をひとつあげながら説明せよ。

課題3 VTR教材「21世紀の美人をさぐる」の内容についてコメントせよ。

第2節 映画で学ぶ人間関係入門（p.146-159）〔人間関係入門〕

人間関係、対人行動、好きになることと愛すること、リーダーシップ、人間関係の発展、自己開示の相互性

・「図説 現代の心理学6 社会心理学入門」講談社 1-49

・長谷川・岡堂編「人間関係の社会心理」金沢文庫

・松井豊「恋愛の科学」サイエンス社

・三隅二不二「リーダーシップの科学」講談社ブルーバックス

課題1 ルビン、デイビス、スタンバーグのいずれかの理論から、恋愛と友情は両立するかを論ぜよ。

課題2 映画「男と女」における人間関係の発達に伴う男女の対人行動の変化を記述せよ。

第3節 心理学の歴史（p.10-11）

プスケのロゴス、アリストテレス、ヴント、ワトソン、ヴェルトハイマー、フロイト、行動の科学、行動科学

・今田恵「心理学史」岩波書店

・ノイマン「アモールとプシケー」紀伊国屋書店 3-59

・大山・詫摩・金城「心理学を学ぶ」有斐閣選書 18-19

課題1 「アモールとプシケー」を要約し、感想を述べよ。

課題2 心理学史を略述しながら、Ebbinghausの“Die Psychologie hat eine lange Vergangenheit, doch nur eine kurze Geschichte.”という言葉の説明せよ。

第4節 心理学研究法(p.11-12)

心理学の定義、心理学の4大目標、記述・説明・予測・制御、心理学の研究の型、実験室的研究、現場研究、臨床研究、観察、実験、調査、面接調査、質問紙法、検査、矯正

- ・大山ほか「心理学を学ぶ」有斐閣選書 1-15
- ・ベル・ハント「プログラム学習による心理学入門」学研 7-47
- ・末永俊郎編「社会心理学研究入門」東京大学出版会
- ・原岡一馬「心理学研究の方法と問題」ナカニシヤ出版

課題 心理学研究法についてキーワードを10以上用いて400~600字でまとめよ。

第5節 個性・自我の発達 -心理テスト (p.112-121, p.136-144) [性格テスト]

課題1 エリクソンのモデルをふまえて、自分自身の自我の発達を論ぜよ。

課題2 授業中に実施した性格検査を分析し、その結果を考察せよ。

第6節 エソロジー (p.122-135) [VTR教材 赤ちゃん、ニホンザルの子育て-母親の役割を考える、白い恐怖]

課題1 エソロジカルアプローチを説明せよ。

課題2 精神分析と行動分析の違いを述べよ。

課題3 あなたはフロイトのいう無意識の存在を信じるか。論考せよ。

課題4 授業中にみたVTR教材についてコメントせよ。

第7節 学習 -強化のスケジュール (P.31-43)

予習課題 教科書を読んで、次の語句を説明せよ。

学習の定義、パプロフ、古典的条件づけ、無条件刺激(US)、無条件反応(UR)、条件刺激(CS)、条件反応(CR)、ソーンダイク、道具的条件づけ、問題箱、被験体、学習曲線、オペラント条件づけ、スキナー箱、強化子、正の強化、負の強化、報酬と罰、般化、転移、形成、消去

- ・詫摩武俊編「心理学」新曜社 31-41
- ・パウアー&ヒルガード「学習の理論 上」培風館

課題1 古典的条件づけとオペラント条件づけを比較せよ。

課題2 強化のスケジュールを例をあげて説明せよ。

第8節 認知 -記憶の実験(p.44-59)

感覚記憶、短期記憶、長期記憶、マジカルナンバー7、チャンク、維持リハーサル、精緻化リハーサル、エピソード記憶、意味的記憶、ネットワークモデル、スキーマ

課題 授業中に行った記憶の実験についてレポートをまとめよ。

第9節 特殊環境下行動(p.90-91) [VTR教材 運転における危険感受性を高めよう]

課題1 VTR教材をみて、ドライバーが安全運転のために心がけるべき事項を述べよ。

課題2 教科書の「交通行動」(p.184-197)を読み、人間の交通行動の特性をまとめよ。

第10節 反健康行動 (p.237-251) [smoking]

健康、反健康行動、喫煙、飲酒、肥満、薬物常用、依存、中毒、動機づけ、自己ハンディキャップ方略

課題1 人はなぜタバコを吸うのかについて論ぜよ。

課題2 どうしたらタバコをやめられるのか、心理学的に考察せよ。

課題3 反健康行動を促進する社会的な要因を具体的にあげ、その理由を述べよ。

授業の進め方

講義の前に教科書の該当範囲は読んでおくこと。また、授業中に「キーワード」をいちいち説明しないので、平凡社の「心理学事典」や岩波の「心理学小辞典」などでキーワードを調べてその意味をよく理解しておくこと。

「課題」は試験までに必ずやっておくこと。これらをそのまま試験問題として出題する予定であるので、試験までによく準備しておくこと。

授業中に小テストやアンケートなどの課題を課すことがあるので、課題提出用のB5版のレポート用紙（あるいはそれに準ずるもの）を毎回用意しておくこと。

評価

評価は次の3点をもとに、厳正かつ公平に行う。

1. 期末試験
2. 授業中の小テストや課題
3. 授業への積極的、協力的な参加態度

なお、レポートを提出させる予定はないが、自発的に提出する場合は受け付け、それを加味して評価することがある。この場合は、3冊以上の文献を読んで、あるテーマについてそれらを引用しながら、自分の考えを論述し、引用した文献のリストを最後にあげること。レポート用紙または原稿用紙5枚程度で、必ずホッチキス綴じにして、授業中に手渡すこと。郵送や代理は受け付けない。

以上

2. 学生の授業評価用紙の様式（一部省略）

○課題 前回の授業の内容を簡単にまとめ、コメントせよ。

○きょうの授業について評価して下さい。

授業のテーマはなんでしたか

		+	+	+	-	-	
		+	+	+	-	-	
テーマ	関心がある	1	2	3	4	5	関心がない
内容	おもしろい	1	2	3	4	5	つまらない
	ためになる	1	2	3	4	5	くだらない
	むずかしい	1	2	3	4	5	やさしい
教材	適切	1	2	3	4	5	不適切
説明	わかりやすい	1	2	3	4	5	わかりにくい
話し方	早い	1	2	3	4	5	遅い
	ききとりやすい	1	2	3	4	5	ききとりにくい

その他、感想やお気づきの点や質問があればお書き下さい。

3. 受講生の声

2回目(10.28 AV授業)

- ・教養原論やから、最初はかなりなめてかかってたんですが、今日の授業は非常に興味深く(男と女の関係だったから)、とてもおもしろかった。来週もぜひつづきをやってください。(法 K.Y.)
- ・映画の登場人物の表情を使った授業は、理解しやすくよいのだが、一々説明が入るので、ちょっとうっとおしい。たとえば、これこれの仕草は何を表現しているか分かりますかという質問に対して、分かる者に発表させて、討論させる方が理解がより高まると思う。(法 I.T.)
- ・学生に理解させるための、様々な工夫が感じられ、非常にありがたいです。(法 K.H.)
- ・確かに行動は心を表すかもしれませんが、行動ばかりを今日は問題にしすぎていたので、来週はもっと他のものを聴いてみたいです。(法 T.S.)
- ・これまでの大学の講義にはないおもしろさがあった。こんな講義を続けてほしい。(法 M.T.)
- ・自分の実際の行動にダブらせて見ると、とても面白かった。髪を触れる、一緒に食事をするなどの行動のイミを先生が指摘するたびに、思い当たる点があり、また、心の奥深くを突かれたような気がした。今後の参考にしようと思うが、表情や動作を見すぎて、ぎこちなくなるかもしれない。(経済 S.H.)
- ・昨今、人間関係を自分の気持ちだけで率直に考え、他人がどう考えているのかを憶測することは不可能と思ってきた。だが、今回の授業で人間の表情を研究することで人間の心理変化を巧みに把握でき、興味のある授業でした。(経営 S.S.)
- ・人間のすべての行動が、何か他のことを暗示していたり、深い意味を持っていたりする、と考えることにとっても興味をもった。(経営 M.N.)
- ・もう一度、映画で学ぶ人間関係をやってほしい。初対面の人と話すときのよそよそしさ、会話の進め方にはなるほどと思うところがあった。なかなか、好奇心をそそられる内容でグッド。これからもこの調子でお願いします。(経営 S.K.)
- ・1つ1つの行動で心理状態がわかるというのに驚きました。普段の自分の行動と比較してみて、けっこうあてはまるもの(?!)があったような気がしました。(経営 S.Y.)

3回目(11.4 AV授業)

- ・映画は授業の題材として適切であり、興味をもてた。先生が言ったように音なしで見てもおもしろかったのでは。(法 K.Y.)
- ・映画の音声を消して表情だけから状況や人物の心理を読みとることもできそうなくらい、わかりやすかった。[授業で配布したliking & loving theoryに関する英文の教材は]典型的な愛の理論のテキストとしても役に立つと思う。(経営 K.M.)
- ・前回と同じになるが、やっぱり表情だけでその人の心の内がわかるのだろうか。もし、わかるのなら、その人は恋愛の達人、羽賀研二をこれるプレイボーイとなれるであろう。女性の「下唇をかむ行為」「髪をさわるしぐさ」など、いくつか例を挙げられたが、果たしてその通りか、以後、気をつけてみたい。(経営 S.K.)
- ・映画の感想：白黒でありおもしろそうでない映画だなと思ったが、表情やモンタージュ技法に注目してみると、心の移りかわりなどよくわかって、こういう映画の見方もあるんだと感心した。(経営 F.Y.)
- ・俳優、女優の演技力はすごい。(経営 S.N.)
- ・映画の内容は単純だったけど、表情や行動をじっくりとみながら観てみるとおもしろかったです。(経営 S.Y.)

4回目 (11.11 ディクテーション)

- ・疲れました。(法 I.N.)
- ・[読み上げが]遅すぎて全体が把握できない。(法 Y.J.)
- ・こんな授業もいいと思います。(法 Y.M.)
- ・dictation の形で授業を行うのはちょっとつまらない方法だと思う。OHP または黒板を使ったらいいのではないかと私は思う。(法 留学生C.B.)
- ・手ばかり使って、頭を使えなかった気がします。(法 K.H.)
- ・そのまま読まはるのなら、プリントを配ってほしいです。(法 N.E.)
- ・こんなにまとめにくい授業は初めてだ。ただ棒読みでなく、もっと生きた講義をしてほしい。(法 Y.M.)
- ・今日は講義形式の部分があり、いままでそうでなかっただけに、かえて新鮮だ。(法 T.N.)
- ・映像 [OHP] を見せたり、神話のはなしをしたりしてあきさせない授業でした。(法 T.M.)
- ・レジュメにして配布してほしい。その方が理解しやすい。(法 T.K.)
- ・いままで心理学を学んだことがなかったので、心理学史も知らなかったから勉強になった。(経済 H.S.)
- ・なんだか哲学っぽくて難しかった。わかるようなわからないような・・・。(経済 K.M.)
- ・雑談(キューピットの話)がおもしろかった。(経営 K.M.)
- ・しんどい。(経営 O.T.)
- ・[先生の]話し方を聞いているとせわしないような気がする。もう少し、落ち着いてというか、ゆっくりというか、で話してほしい。面白い話でも、話し方がそうだと、その面白味が半減してしまう。話の間が少し欲しい。(経営 S.K.)
- ・[「疲れたでしょうね」との教師の一言に対して。]それほどつかれないですけど。(経営 K.N.)

5回目 (11.18 ディクテーション)

- ・先生が読むのが少し速いので、もう少しゆっくり読んで欲しいです。今日はフロイトのことが出て来て、次回も楽しみです。Anna, O. の例は興味深そうです。(法 T.M.)
- ・まじめな授業も好きですが、やはり手が痛いです。(法 Y.M.)
- ・手が疲れた。実戦的な講義は最初だけなんですか。そのような講義を希望します。(法 K.M.)
- ・黒板を利用してわかりやすかった。(法 N.T.)
- ・前回よりはわかりやすかった。(法 Y.M.)
- ・ディクテーションを続けるかどうか、もう一度見直して下さい。(法 H.K.)
- ・今日はほどよいスピードだった。(法 Y.H.)
- ・映画などを使ったヴィジュアルな授業を期待しています。(経済 Y.Y.)

6回目 (12.2 ディクテーション)

- ・心理学-フロイトと端的に結びつけがちであったが、決して絶対的なものでないということがわかって、積年の謎がとけました。(法 T.M.)
- ・またもやまじめな授業だったのですこしつかれました。(法 Y.M.)
- ・書き取りはどれも要領が悪いように思います。(法 E.J.)
- ・心理学と政治学のつながりを再認識させられた。(法 N.T.)
- ・テーマによって授業への集中力が違う自分に気付いた。(経済 S.H.)

7回目(12.9 講義とアンケート)

- ・難しかったです、ためになったような気がします。(法 Y.M.)
- ・むつかしい。眠い。(法 I.J.)
- ・難しい内容だったが、説明はわかりやすかった。(法 Y.M.)
- ・今日はアンケートがあったせいかずっと短く感じました。(経済 Y.K.)
- ・どういった方法で性格を検査するのかやってほしい。(経済 H.S.)
- ・適性検査のつくり方はおもしろくおもった。(経済 K.K.)
- ・難しかったです。でも、今まで心理学というものを漠然としてしかとらえられなくて、非科学的な気がしていましたが、今回の授業で純粋に科学として理論だっているのだなと感心しました。(経済 H.T.)
- ・適性検査の話がためになった。(経営 F.K.)
- ・実験と検査のちがいの説明がわかりやすかった。(経営 F.Y.)
- ・アンケートをやってみると、自分が少しわかってくる気がして、なんとなくこわかった。(経営 O.S.)